

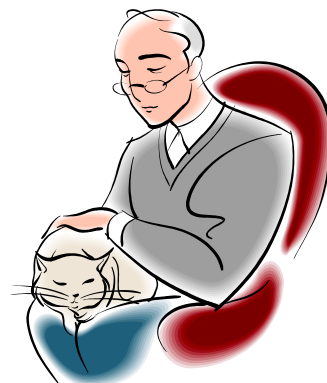
CL 寓話

Wimp

いくじなしのスタート

—A Handbook for Constructive Living から「行動が人生を動かす」に掲載されなかった寓話—

David K. Reynolds, Ph.D.




カーターの身体はばらばらに壊れてきた。肩の痛みはよくなったが、右下の奥歯が痛み始めていた。家の外ではいつでも、公衆トイレの場所を探すのに目を凝らさねばならなかった。夜はトイレに行きたくて何度も起きなければならなかった。いつも身体に疲労感があった。腫瘍があちこちにできた。目も耳も年々弱くなった。鍛えようとして膝の後ろの腱を伸ばしてしまい、治療に数カ月かかった。説明しがたい熱が出て、震えや昏睡状態を引き起こしたりもした。コレステロール値、血圧、精子数、とにかくどれもこれも調子のよいものは何もなかった。50年間頼りにしてきた体の土台の一つ一つが自分を見捨てはじめているのだ。もちろん、カーターは医者や指圧師周りをし、カイロプラクティックのところまでも行った。薬棚はまるで薬局のようだった。書棚には地方図書館の健康部門に肩を並べるほどの収集があった。そして彼の身体はだめになっていった。

この場合、カーターには二つのコースが開かれていた。

ひとつ目はカーターは宿命的に避けられないものを受け入れるよう選び、勇敢な戦いをしたが、時と年令、遺伝的に少し早めに負けてしまったことを認められた。ゆっくりと休むことに時間を使ったり、鎮痛剤を強くしてもらったり、誰かに必要な世話を頼んだ。自宅で自分の状態に合わせて生活するのも学んだ。ふたつ目の選択は、苦痛と共に自分を外の世界に向けることだった。痛みをこらえているのを人に知ってもらえなくても、楽な他の人生がなくなるとしても、何度もベッドから自分を引きずり出さなければならなかったとしても、少なくともこの選択は関心をよぶ。

そこで、カーターは痛みがあっても行動するやり方をやってみた。激しい痛みと苦しさから人生の深みを新しく経験した。力強く苦しんだ。痛みをすっかり忘れて、生きることにならなくなると、死ぬことさえ忘れる瞬間があった。そんな時には、自分が選んだ新しい道を評価したり、疑ったりすることはなかった。それでも、惨めな時には、この行動の方針が誤っていないか疑うこともあった。

行動し続けた三年後、カーターは楽で簡単な道を選択した。その時には身体はいろいろと制限されていたが、三年間を行動に使った生活で満足だった。もし安易にひきこもっていたら、後で行動に戻るやり方はわからなかったにちがいない。カーターは体を楽にしているよりは、仕事に身を置いて楽になる方がいいと結論づけた。p.158

 [目次へ戻る](#)